

令和4年度地域の絆づくり事業 第3回講座

「若手のリーダーが考えるこれからの地域づくり」

令和5（2023）年1月24日(火)13:00～16:00

コミュニティスペース「FLAT」（旧小浜荘）（参加者20名）

1. ゲスト：榎原 正都さんのお話

《榎原正都（かしはら まさと）氏》

- ・湯浅町田村に生まれ、神戸の大学を卒業後、東京で会社員として勤務
- ・たまたま目にした「みかんの消費量が年々減っている」というニュースや、15年ぶりに参加した地域の秋まつりで、ふるさとの魅力に触れたことなどがきっかけとなり、田村の振興にかかわりたいという思いが高まって、湯浅町へのUターンを決意
- ・地元に戻ってからは、ふるさとの魅力を発信する活動に取り組み、「田村協議会」の会長として、「田村に帰ろう・関わろうプロジェクト」を立ち上げ、「拠点整備」・「交流促進」・「産業振興」を事業の3本柱に活動
- ・湯浅町・広川町の公民館で、スマホ講座の講師を務めたり、湯浅中学校で、「ふるさと講座」の講師となり、中学生に湯浅の魅力に気づかせ、発信する講座を実施したりするなど、地域の社会教育や学校教育の推進に貢献



《榎原さんと田村とのかかわり》

- ・中学校卒業後は、ほとんどかかわりなし
- ・田村を出たかった（見たことがない世界を見たい）
→ 若かった

《サラリーマンとしての経験》

- ・毎日が刺激的
- ・破天荒な社長との出会い
- ・課員30人から一人になった
→ 突然の営業課長に抜擢（3年目）
- ・もう無理だと思った時の社長の言葉「お前も逃げるのか？」
→ ふんばってみよう！（転機）
→ クリエイティブでおもしろいこの会社が好き
→ 営業（外部に魅力を伝える）で奮闘
- ・クリエイターに話を聞くことで、商品の良さについて理解が深まる
→ 営業に活かすことができた



世の中には、本質が伝わっていないことがたくさんある

《田村に戻るきっかけ》

- ・ たまたま見かけたみかんの消費量減少を伝える記事
→ 帰ろう（地元に戻って地域を見よう）
- ・ これまでの経験で培ったことを活かし、SNSや動画を活用してもっとうまくみかんとPRできるのではないかな
- ・ 田村に戻ってしばらくは外に出歩かなかった
→ 地域を離れていた期間が長すぎた
- ・ 田村まつりの一か月前 青年団が毎晩行う獅子舞の練習、笛や太鼓の音
→ ちょっと外に出てみようかな
→ 青年団で活躍する幼馴染や地元の人との再会（いろんな話）



まつりの前のこの集まりがすごく楽しい

こんな場所が一年に一回しかないのはもったいない → 「FLAT」設立

- ・ 田村には何もないと考える人や田村に戻ろうかなと考える人に地元の魅力を知ってほしい
- ・ 自分が田村まつりとかかわって味わった経験を若い世代に味わってもらおう

《東大みかん愛好会との交流》

- ・ おもしろい → 直接東大みかん愛好会に連絡
- ・ 東大みかん愛好会は、田村で農業を営む友達と既にかかわりがあった
- ・ 東大みかん愛好会との交流 → 一人一人に語りかけて地元の良さを伝える



田村に来てくれた人に、田村の良さを伝える→田村のファンになってもらう

→ファンも田村の良さを発信してくれる→さらにファンが増える

こんなサイクルができるのではないかな

- ・ 東大みかん愛好会とみかん農家の方とのふれあい
→ 地域外の人との交流がもたらす効果

《FLAT（フラット）》

- ・ 移住してくれたらうれしい！外からかかわってくれるだけでもうれしい！
- ・ 子供たちが地元で愛着をもつきっかけをつくれるような場所
- ・ 地域や地域外の人が出会うきっかけとなるような場所
- ・ 海が近い→水平線（フラット）が見える
- ・ 年齢や地域、立場を越えて誰もがフラットにふらっと（フラット）立ち寄れる場所
- ・ 「拠点整備」…FLATの運営、「交流促進」…イベントの開催、「産業振興」…新たな商品の開発などを事業の3本柱に活動

《担い手の育成》

- ・担い手→地域のことを自分事として考えられる人材
- ・やっている事、物への愛着が大事
 - 愛着があるからこそ、その良さを伝えられる
- ・地元→好きな人がたくさんいるところ

《誤解と猛省》

- ・みかん→もっと上手に売ればいいのに！
- ・田村のみかんを集荷し、出荷するシステムはすごかった
 - 一人一人が責任をもって生産し、共同で販売を行う
- ・田村協議会を立ち上げ
 - 区長や漁業組合の賛同が必要となるが、難しかった
- ・ここで活動するために大事なこと
 - 「何をやるか」より「誰がやるか」
- ・田村にかかわる活動はたくさんある（消防団など）
 - まつりの青年団にしか参加していない状況では、何を言っても周りからの賛同は得にくい



大切なのは相互の信頼関係

- ・田村協議会の活動を理解してもらえるよう説明と実践（時間ががかる）
- ・地域のキーマン（①地域に影響力のある人 ②地域を安心させられる人）を味方につける

《現在》

- ・田村移住者を支援（住む場所を貸すなど）
 - ・湯浅町教育委員会の依頼で、夏休みに小学生を対象にわくわくチャレンジ教室
 - 小学生に面白いと思ってもらえる経験
 - ・中学生にふるさと講座
 - 地域のおもしろさを発掘
 - どうやったらおもしろいと思ってもらえるか
 - 選択肢の多さを自覚してもらう
 - ・地域おこし協力隊と活動
- } 帰ってきたい地元と思ってもらえるようにしたい

《展望》

- ・魅力を発信して移住者を増やす
- ・「FLAT」をもっと人が集まりやすい空間に変えていく
- ・もっと多くの人を巻き込む
- ・担い手に任せていく

2. 座談会

○自分の地域をふりかえって、どんなイベントや活動があったら参加したいか

○地域活動を持続させていくためにはどうすればよいのか

●…ゲスト ○…参加者

- ◎「人生 100 年時代」「人口減少」「持続可能な地域づくりが大事」わかってはいるが、どうするべきかわからない
- ◎わくわくチャレンジ教室…檜原さんの教室は競争倍率が圧倒的に高い
- ◎地域の課題を自分事としてとらえられる人材の確保が難しい（どこも同じ）
- ◎宮原地区
 - 地域に盆踊りを復活させよう
 - 盆踊りを地域の文化に
 - 宮原ホリデーの開催 大人も子供も寄って遊ぶ場を設定
 - ※ 2か月に一度くらい自分たちの負担にならない程度に
 - 竹灯籠 7.18 水害の鎮魂
- ◎一度地域を出た人が地域っていいなと思うところとは
 - みかんを作っている先輩方がかっこよくて、みんなの心が広くて、地域が好き、そんな風に思える地域に生まれたことが誇り
 - 地域に帰ってきて仕事をしていることが自慢
- ◎異動があつて地元で仕事をするようになって、昔叱られた人が自分のことを覚えてくれていて声をかけてくれた（本当にささいなこと）
- ◎どうすれば子供が誇れる、愛されるまちになるのか
 - 自分たちが楽しかったら、子供も楽しいんじゃないか！
 - 楽しい経験が地元愛につながるんじゃないか！
- 楽しんでできるということがすごい（かっこいい）
- 宮原の盆踊りはみんなすごく楽しんでいる
- ◎習い事などで、子供にさせたいことがあるときは、まず親がおもしろそうにそれを見て見せる、そうすれば子供もやってみようという気持ちになる
- ◎まずは、大人が全力で楽しむ
- ◎しんどそうにしていたらだれもついてこない
- ◎教育もそう、楽しそうにしている先生を子供は好きになる
- ◎移住して、余白を残して行動したことで、「ここはもう少しこうした方がいいよ」と助けてくれる人が現れた
 - 「よそ者扱い」をうまく受けるためにどうすればよいかを意識した
- どうやって地域おこし協力隊の活動を地域の人に理解してもらうか
- ◎地域の人と仲良くなれるよう心掛けている
- ◎広川町の広報誌で活動を紹介してもらっている



- ◎小学校の行事に顔を出している
- ◎地域おこし協力隊をもっと活用して、地域おこしの戦力になってもらった方がよい
- 湯浅も春から二人来てもらえる予定
- 活躍してもらえるように心がける
- ◎どうすれば地域おこし協力隊に来てもらえるのか



- 公募
- 田村協議会が受け入れ先となっている
- ◎地域に人材がいけないと言われるが本当にそうか
- ◎もっとあきらめないで、真剣に、広くアプローチしていくことが必要
 - 学校がやってもいい、地域がやってもいい、保護者がやってもいい
- ◎巻き込み方が大事 →自分たちが楽しそうにすることが答えなのかもしれない
- ◎地元の良さや地元での楽しいことを地域の子供たちに十分に与えられていないことが課題ではないか →もっと子供を地域の行事などにかかわらせる工夫をしなければ
- ◎まつりは地域をつなぐ材料として重要
 - しかし、少子化とコロナで地域のまつりがピンチ！
- ◎コミュニティ・スクールで、地域の子供たちにとって何が大事ということをしっかり話し合ってもらうことが大事
- ◎コミュニティ・スクールで、学校と地域がもっと打ち解けて、交流を深めることができれば、地域は変わってくると思う

3. 榎原さんの感想

- ・自分たちの活動や地域の現状、課題を再確認できたよい機会となった
- ・いろいろな地域や立場の人から意見をきくことができてうれしかった
- ・楽しそうにやっていくということがこれからの課題
- ・自分が楽しめるぐらいの余裕をもつ
- ・一辺倒にならず、いろいろな人の意見を聞いて適切に答えを出していきたい
- ・やるからには、地域振興のモデルケースになれるよう取組を続ける

4. 振り返りシートから

○今日の講座で得た「学び」と「つながり」

- ・同じような悩みがある事を共有できたのがよかったです。
- ・担い手のつくり方を考えます。
- ・余白の大切さを学びました。
- ・有田管内の人が多かったので、今後の交流につながればと思います。
- ・教育関係者はよく「有田は一つ」という言葉をつかいますが、社会教育も形だけではなく、実のあるものにしていかなければならないと思います。
- ・これだけの人の前で自己紹介できたことが本当によかったです。

- ・他の人はどんなふうに使っていたのだろうかと思いました。
- ・地域の特性などがあり、和歌山の消極性があるのかと感じました。
- ・榎原様のお話を聞き、体験談をぜひ同じような方へ伝えたいと思います。また、様々なご意見をきかせていただき、今、地域の人から相談を受けている内容と共通していました。もっと個と個を線で結んでいく仕組みが必要だと思いました。
- ・榎原さんのたどった人生のストーリーがお話に深みを与えてくれたと感じました。
- ・「何をやるかではなく、誰がやるか」はコミュニティの中ではよくあることで、だからこそ人間関係が大切なのだと思いました。
- ・自分の地元を「この地域が好き」と思える気持ちを持てるのは、やはり人との楽しいつながりがあったることだと思いました。そしてまた長くその土地を離れていた人に対して、帰郷した時の周りの温かい声かけ、受け入れが大切だと感じました。
- ・地域で楽しいと感じられることを見つけ、またつくり出していく力が榎原さんにはあり、地域だけのつながりだけでなく、他からのつながりを活かして、地域づくりに活躍されているのだと感じました。

○「学び」や「つながり」をどのように活かしていきたいか

- ・少しの余白というのが良かったです。
- ・子供のUターンについて、私自身、地域の良さを知っていないと思い、まずそこからだと思いました。
- ・今年は行動範囲を広げていきたいと思っています。湯浅の協力隊ともタッグを組んでやっていきます。
- ・学校、行政、地域をつなぐコーディネーター的な人を探したい。それによって、もっといろんな社会教育が展開できるのではないかな。
- ・自分事としてとらえる若い人を見つけたい。
- ・今、地域ボランティア団体に入っていますので、その活動の中で活かすことができればと思います。
- ・みなさんと協力して進めたい。
- ・アイデアを形に、自分自身が楽しんでいきます。
- ・家庭教育支援員、公民館主事の両方とも、地域の方々とのつながりが重要だと日々感じています。公民館（図書館）に来てくれる方々との何気ない会話を大切にしながら、どのような公民館活動にしていけばいいか勉強していきたいと思っています。
- ・保護者さんが公民館（図書館）へ来た時に相談を受け「話できてよかったよ」ということもあります。こちらから訪問するだけでなく、保護者さんがここに行けば支援員がいて、気軽に話ができる（相談）と思ってもらえるようにしていきたいと考えています。